

知っているからこそ

岐阜市立藍川中学校二年 泉 日南

テレビや新聞記事などで、よく目にする言葉「障がい」。私は、それに映し出される、「障がい」というもののほんの一部だけを知り、まるで、そのすべてを知っているかのように思い込んでいた。「障がい」とは何なのだろうか。

夏休み、私は市内の障がい者施設へボランティアに行った。活動のため施設に入った私は、なぜか、少しドキドキし、何かを恐れていた。今、振り返ってみると活動前の私は、「障がい」や「障がいのある方」のことを本当はよく知らず、知っているつもりでいただけだった。しかし、本当に知っていると言い切ることのできない自分に少し気付いていたから、怖いなどという気持ちになったのだろう。私は、食事介助、歯みがき介助と入所者さんとのウォーキングをさせていただいた。初めの食事介助では、言葉をかけてくれた入所者さんに、笑顔をつくるのが精一杯だった。何かお手伝いをしなくては、とは思うものの、どうすれば良いのか分からない。結局、情けなくおろおろするしかなかった。彼らは、そんな私をただ、じっと見つめていた。そして、そのまま歯みがき介助になった。私は少しずつ積極的に関わることができるようになった。気が付いたら自ら働くように心がけ、彼らと話もしてみた。そうしたら、少しだけれど、彼らに認めてもらえたような気がして活動が楽しくなってきた。しかし、このときの私は、まだ、自分を認めてもらいたいと自分自身のことを考えるのが関の山。彼らのことを思いやっているとはとても言えなかった。そして、最後のウォーキングの時間になった。この活動は、施設内のスロープや階段を皆で歩くというもので、彼らとよりたくさん関わることでできるチャンスだった。私は彼らと、もっともっと話をしようと思った。うまく関わろうと一人で勝手に勢い込んでいた。しかし、ウォーキングが始まり気が付くと、そこには、私に差し出された手があった。入所者さんの、温かい手だった。彼は、「一緒に。」と語りかけてくれた。

「ありがとう。」

そう笑いかけ、その手を握りハッとした。彼の手は私に、私自身がどれほど大切なことに気付かないでいたかを教えてくれた。本当に大切なこと、それは、相手を想うこと。相手の目を見て、話を聞いて、その想い

を考えるとというあたりまえのことだった。上手に関わろうとか、お手伝いをしなくてはとか、はやる気持ちで一杯の私はそんなことも忘れて、認めてもらえたというつまらない自己満足にひたっていただけだった。本当は、ボランティアに行くような顔をしていただけで、心のどこかに、彼らに対してやってあげるといふ思いを持った私がいたのかもしれない。やってあげるといふ思いは、彼らにとって恩着せがましく、ただ私の気持ちを押しつけているだけのことにしかすぎなかった。私は、彼らと話すとき、自分から話すという思いしかなく、彼らが語りかけてくれる言葉に耳をかたむけることができなかった。彼らの想いを知らうともせず、ただ、自分の考えで動く私に、戸惑いを隠せないのは、あたりまえのことだろう。しかし、そんな私にも彼らは、温かな手で語りかけてくれた。そして、たくさんのことを学ばせてくれた。私が、つないだ手から感じたのは欠けがえのない命だった。一人の人として、幸せに生きるための権利をもつ命。

活動を終えた私から、みんなに伝えたいことがある。それは、施設で活動し、私が感じた彼らの想いだ。彼らにも私達にも、すべての人に人権はある。人から信頼されたい、こう思うのはあたりまえのことだろう。信頼してほしい人などいないと思う。そう、私達人間は皆、同じように働き、まわりからの信頼をうけ、家族や友達と共に楽しく幸せに生きたいと、同じ想いをもって生活している。だから、先入観を捨て、自分と相手との違いを認めてほしい。家族や友達といった自分にとって身近で大切な存在の人たちには、きっとだれもが、ごく自然に優しく接することができるのではないだろうか。しかし、本当の優しさとは、そういった身近な人だけでなく、だれにでも優しく接することのできる心ではないだろうか。知らない人に優しくするのは難しい。けれど、自らが相手のことを知らうとすることから優しさは生まれる。知っているから強く優しくなれるのだと感じた。「障がい」という言葉を目にしても、何も考えられなかった私。活動前、本当は障がい者と健常者の間に一本線を引いていた私。これは、自分はどうかかと振り返ってみないと気付くことはできない。みんなにもいつも、自分はどうかかと振り返ってほしい。みんなが自分の立場で考えることで、少しでも、あなたの周りが変わるかもしれない。

いや、変えていかなくてはならない、私達が。